

新しい社会を拓く学びの構想（3 年次）

～国語力を基盤とした学びを通して～

岩手大学教育学部附属中学校研究部
研究主任 佐藤 寿仁

1 目的とその研究内容

本研究は、平成 18 年度から「新しい社会を拓く学びの構想」と題して第 1 期 3 年、第 2 期 2 年の 5 年の継続研究として推進されたものである。平成 22 年 6 月に行われた第 28 回学校公開研究発表会は 1 期 3 年間に渡る研究のまとめと位置付け、授業公開を中心に行うことができた。前次研究では、各教科において培われたものの深化させ、自己の生活を改善していく姿を目指していたが、その過程において「考えること」ということへの不足を感じ、「考えること」を高めるための「ことばの力」の育成について課題としてあげられた。そこで、本次の研究では「ことばの力」の育成を柱にして、各教科・領域の授業を中心にして取り組むことにした。

先述したとおり、「ことばの力」は思考力・判断力・表現力等の基盤となると考え、活動の中で生徒が得るものを国語力とし、教科の実態に応じて教育活動に盛り込むこととした。その内容については次の（1）～（2）である。

（1）言語活動とその特徴

国語力を、言語を中心とした情報を処理・操作する能力としてとらえたとき、具体的な言語活動として発言するとき行為を「読む、聞く、書く、話す」の 4 つにとらえ、学習活動の見直しを図ることにした。それらの 4 つは、「音声言語」と「文字言語」に分けるものとしどのような特徴があるのかについて図 1 のようにとらえ、実践をした。

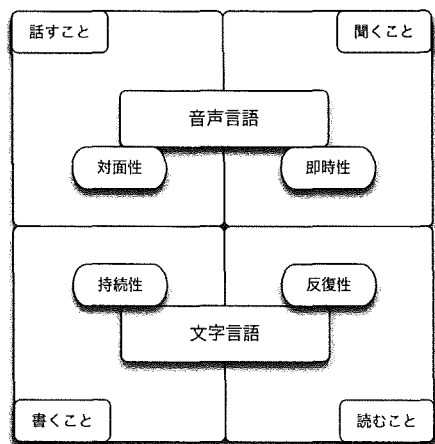


図 1 言語活動の特徴

（2）言語活動における 4 つの国語力の位置付け

4 つの言語活動を教科への実践とつなげていくために教科や領域との関連を図 2 のように考えた。

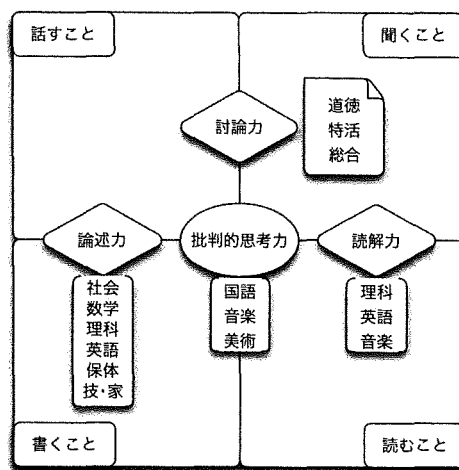


図 2 4 つの国語力の位置付け

各教科・領域でもつ固有の目標に対して、国語力の具体の力として「論述力」「批判的思考力」「読解力」「討論力」の 4 つあげ、教科特性を考慮しながら授業実践を行った。

2 成果

「論述力」や「批判的思考力」を目指すために、自分の考えや意見を大切にすることを通して授業実践を行うことができた。これにより、生徒が問題（課題）に対して、見通しを持ち活動に入ることができ、その過程で論理的に思考していく様相があり、その媒体としてことばが用いられ、学習内容が深化していくのが見られた。

3 課題

成果で述べたことは、主には文字言語であり、書くことで表現していく中で見られるものであった。授業の中では、討論する場面や話し合いの場面があるが、そこについて生徒の表出について大きな課題となった。このことから、音声言語に課題があることをとらえ、今後の研究において音声言語でも国語力の育成をすすめていくことが必要であると考えた。自分の考えを、根拠を添えて表出するとともに対話の中での論理性をみていくことが大切であると捉え、本研究のまとめとする。

新しい社会を拓く学びの構想（4 年次）

～思考力・判断力・表現力を高める学びを通して～

岩手大学教育学部附属中学校研究部
研究主任 佐藤 寿仁

1 目的とその研究内容

本研究は、平成 18 年度から「新しい社会を拓く学びの構想」と題して第 1 期 3 年、第 2 期 2 年の 5 年の継続研究として推進されたものである。平成 22 年 6 月に行われた第 28 回学校公開研究発表会は 1 期 3 年間に渡る研究のまとめと位置付け、授業公開を中心に行うことができた。このときの研究のまとめから私たちは課題を見だし、第 2 期の研究テーマとして「思考力・判断力・表現力」をあげた。これは前期研究で得た学びを貫くものとしての「国語力」の上に思考力・判断力・表現力が、「学びの推進力」となり得ると考えたからである。

本研究では、各教科・領域を貫く思考力、判断力、表現力を次のようにとらえた

【思考力】

目の前にある情報が本当に正しいのだろうか、妥当な根拠はあるのだろうか、別の考え方や解釈はないだろうか、などについて批判的に考える力。

【判断力】

既存の知識や経験を生かしながら、様々な情報の中から適切なものを判断し取捨選択する力。

【表現力】

根拠や事実を示しながら、状況に応じて適切なことばを用いてわかりやすく他者に伝える力。

このとらえを出発点とし、本研究では授業を実践しながら、下のようにして、この 3 つの効力について検証していくこと、また、理論構築を進めていくこととした。

生徒の実態を把握していくために、全生徒を対象に意識調査を行った。この調査は 17 項目あり、下の 4 つの視点をきくものであった。

- ① 授業における思考過程についての自己評価
- ② 考えることやコミュニケーションの必要性への意識
- ③ 話すことについての自己評価
- ④ 聞くことについての自己評価

意識調査の結果、どの項目においても肯定的な意識を持っているといえる。しかしながら、詳細を見ていくと、「コミュニケーションの必要性」を訴える生徒は多いが「話すこと」に対して肯定的に回答する生徒は少ない。また、「聞くこと」については「話すこと」に比べ肯定的である。しかし、「聞くこと」は受動的な行為ではなく、自ら学び、自ら課題を解決すうための主体的行為であると考えられるならば、「話すこと」が低いという結果は、きいたことが自分の思考に十分に生かされていないととらえることもできる。「授業の思考過程」に関する項目では、「日常生活への応用、関係付け」のポイントが低い。これらの結果から、生徒の「考えることやコミュニケーションは必要」という思いが授業や諸活動の場で実現されていない場合があることが明らかになった。我々は反省的に自分たちの指導を振り返り、この状況の改善を図っていかなければならない。特に、生徒が問題を把握して思考・判断し、表現に至るまでのプロセスを大切にしたい授業が求められ、現在の生徒の実態からも思考力・判断力・表現力を高める学びの研究は重要性を増してくると考えられる。

2 成果

生徒の実態を把握することで、思考力・判断力・表現力の必要性を確認するとともに、求められる授業の在り方について考えていくことが私たちの実践に求められることがわかった。また、生徒の学びのプロセスにおいては、学習者が自分の学びを自己内対話や他者間対話を通して思考・表現し、自己の学びをメタ認知しながら新しい価値を創造できる生徒を目指していかなければならないという本研究における学習者のあるべき具体像が見えてきた。

3 課題

生徒の実態から思考力・判断力・表現力についての必要性やそれを目指すための具体的な学習プロセスを基にした実践から、求められる授業について明らかにしていかななくてはならない。本年度には 2 回の授業公開の結果を生かしていきたい。

新しい社会を拓く学びの構想（最終年次）

～思考力・判断力・表現力を高める学びを通して～

岩手大学教育学部附属中学校研究部
研究主任 佐藤 寿仁

1 目的とその研究内容

本研究は、平成 18 年度から「新しい社会を拓く学びの構想」と題して第 1 期 3 年、第 2 期 2 年の 5 年の継続研究として推進された最終年次である。平成 23 年 6 月、11 月の 2 回にわたって行われた実践交流会では、思考力・判断力・表現力を高めることが生徒の学びを推し進めるものになり、新しい社会を拓く人間に近づくものとなるという本研究の流れを確認するものとなった。こうした理論構築や修正を繰り返し、前次研究では目指す生徒像として、自己内対話や他者間対話を通して判断・表現し自己の学びをメタ認知しながら、新しい価値を創造できる生徒と具体化することができた。さらに、研究主題である「新しい社会を拓く」という積極的な人間としての姿勢を培うための大切な手立てとして、メタ認知を促し、自己の学びを構築できるような学習を目指し、授業実践を進めた。

2 成果

本研究において得られた主な知見については、次の 2 点である。

(1) 学びの広がりや深まり

生徒の学びは、次第に広がっていくこと、深まっていくことが望ましいが、教材などの外界の刺激があれば勝手に広がっていくものではないだろう。だとすれば、その広がりや深まりを空間的なものとする手立てが必要である。それを支えるものとして、自己内対話と他者間対話をあげてきた。特に、授業における話し合いや討論の場面における他者間対話は学びや理解の世界を広げてくれるもの（図 1）であり、学

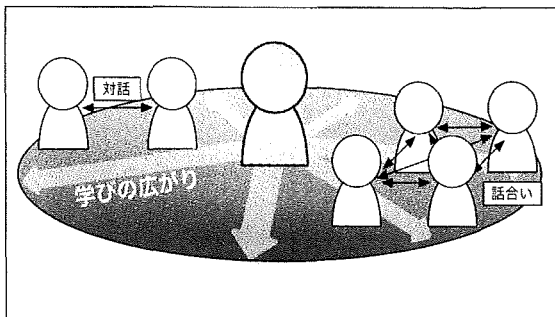


図 1 他者間対話による学びの広がり

習を充実させてくれるものとなる。しかしながら、このことは表面的な理解に終わらせてしまうことにもつながりかねない。そこで、学習者自身が自己の中で対話をし、学びの深化を図るのであれば、他者間対話をしている学習者が自身の対話についてモニターすることが必要である。理解する自分自身を理解することで、わかるという行為が空間的な広がりを見せ始めるのだと考える。特に、学びの 3 要素がそれぞれの直交軸として構成に当てはめることができる（図 2）。

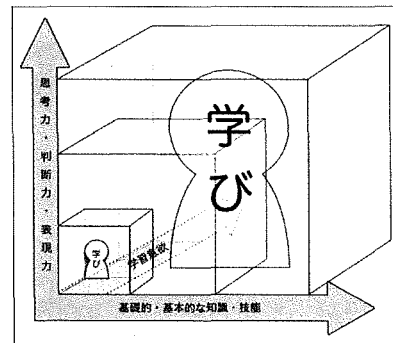


図 2 学びと学力の三要素

(2) 教科と領域の学びの関係性

各教科で培われる思考力・判断力・表現力は教科間で共有されてさらに高められる。そして、その力は教科にとどまらず、領域の授業や普段の生活において発揮されてこそ（図 3）本物の力といえる。このことは、前次研究から触れてきている「学習と生活の一体化」の考え方に繋がっていく。

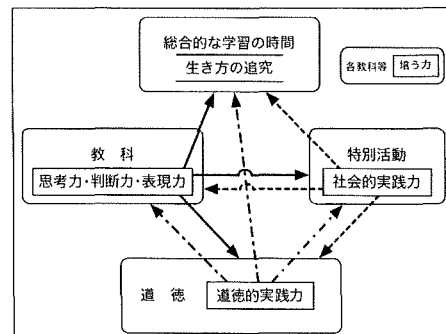


図 3 教科の学びと領域の学びの関係

3 課題

メタ認知や自己内対話を継続的な時間軸の中で考えたとき、単元のデザイン工夫が求められる。単位時間でなく、系統的かつ継続的な指導への具現化が今後の課題となった。

新しい社会に生きる学びの構想（初年次）

～学びの自覚化を促す指導を通して～

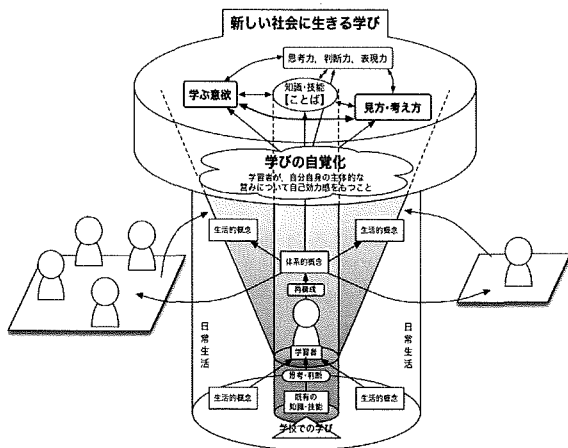
岩手大学教育学部附属中学校研究部
研究主任 佐藤 寿仁

1 目的とその研究内容

前次研究では、国語力、すなわち、ことばの力と思考力・判断力・表現力の二つを視野に入れながら、学習者一人一人の学びの内面に迫る試みを実践した。とりわけ、指導のための評価としての形成的評価やメタ認知の考え方は、学習者自身が自分の学びを知る上できわめて有効であった。しかしながら、この5年間の研究のまとめとなる生徒の意識調査によれば、学んだことを日常生活などに応用すること、自分なりに意味付けすることへの意識が高くないことがわかった。また、他者とのかかわり合いを通して自分の考えを積極的に高めようとする意識も高くないことがわかった。

(1) なぜ、「学びの自覚化」なのか

日常生活へ応用することへの意識や学びの有用感があまり高くないという現状は、新しい社会に生きてはたらく力を最大限伸ばしきれていないこ



とを示している。私たちの教育を反省的に見ると、この部分の働きかけが十分ではなかったと言える。そこで、前次研究のことばの力および思考力・判断力・表現力の指導に加え、「学びの自覚化」を促す指導を強く意識することが重要であると考えた。

自覚とは「自分自身の立場・状況・能力などをよく知ること、わかまえること」であるが、学びの自覚化は単に自分自身を知ることにとどまらず、自己効力感を実感することまでを意味する。そもそも「学び」とは、学習者の主体的な営みである。自分の意志によって、種々の事象にはたらきかけて新しい世界が見えてきたとき、学習者は自分自

身で物事を成し遂げられるという自己効力感をもてると考えられる。学びの自覚化によって学びの高まりや広がりを実現され、そして、学習者の次のステップへの、あるいは生涯にわたっての学びの推進力になることが期待され、新しい社会に生きる力を育成できると考えた。

(2) 学びの自覚化

思考、判断することによってことばを獲得し、ことばを使って表現することによりことばの意味を再構成し、濃密なものにする。学校での学びによって生活的概念を自覚化（メタ認知）することで新しい社会に生きることばの力を育むことができると考える。

本研究は、それだけにとどまらず、新しい社会に生きる見方や考え方を身に付けさせたいと考えている。それはまさに、ことばの獲得のプロセスにおける個々の学習者の「自分らしさ」であり、その自分らしさについて対話させることによって、自分自身を磨かせたいと考えている。これを実現するために必要なのが「学びの自覚化」である。それは、学習者が主体的に諸問題を課題化し、解決していくような学びのプロセスをメタ認知し、自己効力感をもつことである。ことば獲得のプロセスやことばと思考、判断、表現することが有機的に関係し合っていることを自覚化できることは学習者を勇気づけるであろう。次の学びへの期待感である自己効力感は学ばせ意欲に直結し、生涯にわたって学び続ける力となる。そして、ことばの力、思考力・判断・表現力、見方や考え方、学ばせ意欲の総体が新しい社会に生きる学びとなる。

2 成果

前次研究の課題を踏まえた理論構築の過程で、学習者の「ことばの力」について、指導者と学習者の関わり方に検討の余地があり、特に指導する側の意図的な支援と学習者の得る自己効力感に注目することの必要性について確認できた。

3 課題

学びの自覚化を促す指導の在り方としての単元のデザインの充実とその実践による学びの自覚化がもたらす効力についての検証が必要である。

これまでの研究を振り返って

～生徒の獲得すべき力の明確化から、学びのプロセスの顕在化へ～

岩手大学教育学部附属中学校研究部
研究主任 佐藤 寿仁

1 国語力の獲得目指して

平成22年度の研究において「国語力」をキーワードとしてあげた。言語活動の必要が説かれている中、すべての教育活動を貫くものとしての「国語力」に注目し、それを論述力・批判的思考力・読解力・討論力の4つに細分化することで、教科特性に合わせた実践を行うことができた。「国語力」は、教科国語での中心的な獲得となるが、国語科でのとらえ(図1)を各教科・領域に派生させることにより、教育活動全体での言語活動を展開することができた。当時は、言語活動の必要性についていわれ始めているときであり、本校の研究は全国的にも先進的な取り組みであったといえる。

＜教科国語からの四つの視点＞

- ① 自分の考えを持つ、持ちながら
- ② 事実と意見
- ③ 全体と部分
- ④ 中心部分と付加部分

この視点を軸にしながらか教科・領域で実践を行った。その実践の中で学習者である生徒が自分の考えや意見について理由や根拠を明確にして進めようという姿勢が見られるようになり指導者自身が学びとは何かについてとらえ直すことができた。また、論述するという視点に立ったときに、問題把握のさせ方や読解力の重要性について反省的にとらえるようになった。

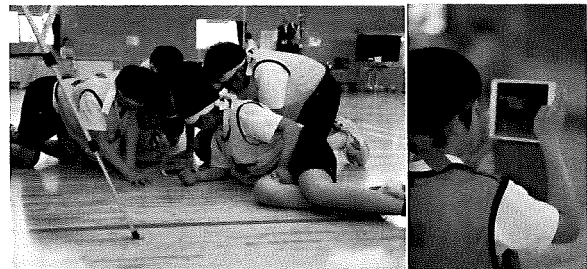
2 力の表出から内面理解への移行

国語力の獲得を目指し、そのことから学習の構築が円滑になることはわかってきたが、この力の獲得の過程を振り返ってみると、生徒の自身の思考の様子を振り返ってみることで「よりよく」といったような磨き上げる段階を生み出させることが、国語力の獲得をより強めることがわかってきた。つまり、生徒が自身の思考と向き合っていくことで、自分自身の考えを客観的に見取り、理解を深めていけるということである。そこで、学習者の自己内対話について取り上げることにした。自分自身との対話によって、何が分かっているのか、何がわからないの

かなどについて自分自身をモニタリングする過程を大切にしながら実践を行った。授業での振り返るときに自己内対話の場面を設けた。

3 内面の思考を表出させること

平成22～24年までの研究では、力の獲得とそれを支える学習者の思考過程について取り上げてきた。これらの研究を振り返っていくことで自己内対話の有効性は確認できたが、課題としてそれと向き合う私たち指導者側の手立ての改善が求められることがわかってきた。学習者が学びを自ら深め、発展させていくためには、自己内対話の精度をあげていくことが必要ではないだろうかという視点で私たちの指導していくべきことを確認した。



上の写真は保健体育の授業の一場面である。バレーボールを題材にしたものであるが、自分たちの動きやプレイをiPadで記録し、その動画を見ながら、自分たちの姿、改善策を話し合っている。自分の思考と実際の動きを言葉によって対話することで、よりよいものは何かをいうことを考え、またやってみる過程をつくっている。この過程で保健体育であっても思考の時間を確保し、自分たち自身をモニタリングすることから次を目指す方向性などを確認することは学習者の自己効力感の積み重ねることにつながり、学習意欲の高まりも見られた。

4 学びの自覚化と学びのプロセス

この4年間でわかってきたこととして、学習者の内面に関わっていくことで学習の質が変わるということである。学びの自覚化は、学習者が学びの価値付け深めることにつながると考えられ、自立した学びへと変容させていくことになると考え、研究の成果としている。